



成城官能夫人

南里征典

せいじょうかんのう ん じん
成城官能夫人

なん り せい てん
南里征典

© Seiten Nanri 1992



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1992年3月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-185138-1

江苏工业学院图书馆

藏书章

成城官能夫人

南里征典

講談社

成城官能夫人

——
目次

第一章 魔の刻 — 9

第二章 偽装離婚 — 35

第三章 ある日、突然に — 80

第四章 黒い訪問者 — 114

第五章 蜜の疑惑 — 154

第六章 血の暗転 — 199

第七章	異人館の街	234
第八章	潜伏行	272
第九章	紅葉連山	304
第十章	夜の牙	328
第十一章	悪夢へやがて朝に	363
解説	佐々木知彦	418

成城官能夫人

第一章 魔の刻

1

誕生日には何かが起きる。

そういう予感がしないではなかった。

亜希子あきこの予感は、たいがいあたる。九月の初め、まだ夏の余熱をもつ庭の木立ちの青葉が、浴室のガラス窓に影を映うつしていた。風に揺れるその葉陰をみながら、亜希子はバスルームの鏡の前に立ち、ワンピースとスリッパとパンティを脱ぬいでいった。

午後四時である。その日は船山亜希子の二十七回目の誕生日であった。彼女にとって決定的に不幸な事件が起きたのは、まさにその誕生日なのであった。

亜希子が、成城学園の船山慎平しんへいと結婚して、三年たつ。子供はいない。双方の誕生日には夫婦二人きりで、街に出て、ちょっと贅ぜい沢な食事をして祝うという習慣が、いつのまにか二人の間にはできていた。

今日も亜希子は、夫の慎平と日比谷映画街で六時に待ち合わせをしていた。映画を一本みて、それから銀座・並木通りの三笠会館にくりこもうという約束だったので、亜希子は早めに外出する心づもりで浴室に入り、シャワーを浴びて化粧に取りかかるところだった。

ちょうど、脱ぎ終わって素裸になり、タオルを片手にバスルームとの仕切りをあけた時、電話のベルが鳴りだしていた。

「困ったわ。誰かしら……？」

電話は、鳴りやまなかった。

服を身につけるのは面倒だったので、亜希子は太急ぎでバスオールで胸だけを隠し、スリッパもはかずに廊下を急いだ。

電話台は、玄関の横にある。

「はい。船山でございますが」

「ああ、私だ。すまんが、急用ができちゃって、今夜の約束、だめになった。誕生日のお祝い、また後日にしてくれないか」

電話は、夫の慎平からであった。

「どうしても、だめなのお？」

亜希子は、思わず、甘え声をだした。

「うむ。これから、人に会わなければならぬし、急な会議もできてしまった」

「そうですか。あたし、これからお風呂に入って、外出の支度をしようと思ってましたのに」

「すまん。償いはまた考えるよ」

「残念だわ。じゃ、つきあい酒はほどほどになさって、早く帰ってよ」

落胆はしたが、夫を恨む気にはなれなかった。洋食器をアメリカやヨーロッパに輸出する船山貿易の青年社長といわれる船山慎平は今、円高経済情勢の直撃を受け、事業がなにかと大変らしい……。

亜希子は今夜の行事を諦めて受話器を置くと、浴室に戻った。なにかしら期待していたものがプツンと切れたようで、妙におさまりのつかない気分だった。

その気持ちを切りかえるように、彼女は姿見の前に立ち、ぱつと勢いよく胸に巻いていたバスタオルを取った。まだ子供を産んでいない亜希子の身体は若々しい。乳房がはずむようにあふれ、下腹部の濃すぎるくらい茂みが、艶やかに鏡の中で光をはじいていた。

亜希子のヘアは広く繁茂してはいないが、濃く詰まった感じで、肌が白いため、漆黒多毛といった感じの、きわ立つ鮮やかさを見せているのだった。

その眺めになんとはなしに微笑し、タオルを片手に、バスルームとの仕切り戸をあけた時、表のほうで今度はオートバイのブレイキの音が響いた。

「あら、オートバイ……誰かしら？」

一瞬、耳をすませたが、チャイムが鳴るふうではなかったので、隣家への届け物かと亜希子は安心して浴室に立ち、ノズルを絞ってシャワーを浴びはじめた。

シャワートップから熱い湯がほとばしって、亜希子の白い、豊かな胸を叩きはじめる。亜希子

はこの感覚が好きである。熱いシャワーのほとばしりを受けているうち、乳房のうえの乳頭がしだいに、硬い尖りをみせてくるのがわかる。

今夜のデートは壊れてしまったが、久しぶりの誕生日の夜に交わされるであろう夫との密度の濃い寝室への期待も芽ばえ、亜希子は立っていられなくなるのだった。

亜希子はやがて、洗い桶に腰をおろした。タオルを使わずに、シャワートップに手をやり、ほとばしる湯を乳房、腹部、太腿へとあててゆく。

湯はやがて茂みにむかつてほとばしりはじめる。デルター帯が、砕け散る湯に反応する。湯の束が茂みの下の秘唇を激しく叩いた時、あっと細くて小さな声が、亜希子の唇から洩れた。

それは実際、思いがけない反応だった。左手の指が茂みの下にのびて、思わず身体をひらく。秘唇のあわせ目から湯に打たれて濃いうるみがあふれはじめ、亜希子は羞恥に頬を染めた。

「あ、あああ……」

と、亜希子は声を洩らした。

誰にも見せたことのない、午後の一人だけの秘儀。その恥ずかしい状態に脳髓の奥をジーンとしびれさせていた時、背後で突然、ドアが開いた。

ぎよっとして、ふりむいた。

「誰？」——瞬間、あっと叫んだ。

男が一人、亜希子をみつめてそこに立っていたのである。

「まあ！ 直彦さんじゃないの！」

叫び、急いでタオルで胸を隠した。

浴室に入ってきた男は、大学四年生の船山直彦であった。慎平の弟なので亜希子にとっては義弟にあたる。

無言で、睨みつけるように浴室の壁にもたれて立っている直彦の姿が、どうも、ただ事ではない。

「見たよ、義姉さんの秘密——」

直彦はどこか粘り眼をむけた。

「何をおっしゃるの。出ていって」

「ねえさん、そうむきになることもないさ。快感に忠実なのは人間の本性でね。ぼくだってあそこ熱いシャワーをあてると、ピンピンと感じて、男性自身が勇ましくなってくる」

「いやらしいことを言わないで！」

みると、直彦は額から血を流しているのだった。ヘルメットを小脇に抱えて、泥だらけのジャンパーにツーリングブーツ。乗っていたオートバイが、近くでトラックに接触されたらしい。路上に放りだされ、怪我をして家に転がりこんできたところだという。

そういえば、亜希子の浴室に断りもなしに侵入してきた厚かましきとは別に、直彦は眉間のあたり妙に暗いものを漂わせ、「引っかけたトラックは逃げやがった。あの運転手、こんど見つけたら、叩き殺してやる！」

教養のある大学生にしてはふさわしくない言葉を吐き散らしながら、直彦はずるずると浴室の

タイルの上に崩れこみ、大の字になって横たわってしまった。

亜希子とて、状況が判然としない。

時が悪い。場所も悪い。秘部にシャワーをあてていた恥ずかしい姿を見られたという、火の出るような羞恥心と怒りにまみれながらも、早く平常心をとり戻さなければ、と焦るのだった。

「お医者さん呼びます。さあ早く、お部屋に戻って」

亜希子は自分が素裸であることを思いだし、あわてて身体をバスタオルで包むなり、負傷して横たわっている直彦から泥だらけのズボンとジャンパーを脱がせて、抱きおこそうとした。

直彦の呼吸に酒の匂いを嗅いだ。

「まあ！ 昼間からお酒を飲んでるのね。交通事故といっても、それじゃあ酔っ払い運転じゃありませんか！」

叱りつけるように言いながら、ブリーフの隙間に猛々しい男性の欲望のしるしをみて、あわてて眼をそらす。

「ねえさん、おれのことはいいい。放つといてくれよ。ひとりでシャワーを浴びるからさあ」

「このままでは、いけません。風邪をひくわ。今、お医者さん呼びます」

亜希子がタオルで胸をかばって、急いで浴室を出ようとして背中をむけた時、突然、直彦が両手をのばして引き寄せ、顔を近づけてきたのである。

はじめは、ただ身を支えただけかと思っただが、唇が近づき、接吻するつもりなのだと気づいて、あっと叫び、亜希子は直彦の身体を突きとばそうとした。

「なにをするの。はなして!」

直彦の唇がすつと押しつけられてきた時、亜希子はいやいやをするように激しく首をふった。が、激しい抵抗をすればするほど、かえって胸のバスタオルがほどけ、乳房も股間も露わになるように、亜希子はほとんど、困惑してしまふ。

「直彦さん! 悪戯はいけません。主人に言いつけますよ」

「大丈夫だよ。兄貴は今夜、帰ってはこないんだ。ねえさんと約束していた例の誕生日祝い、都合がわるくて、中止するそうだよ」

行事が中止になったことは電話を受けて、知っている。でも、今夜は帰宅しないということは、どうということか?

「それは、どういう意味?」

「ねえさん、会社は今、大変なんだよ。倒産するかしないかの瀬戸際らしい。今日もおれ、用事があって会社に寄ってきたんだ。そうしたら、兄貴は会議とか金策とか銀行対策とかに走りまわって、必死だったよ。そういうこともあって、兄貴のやつ、今、とても平常な神経ではないらしい。会社内に、愛人も作っているんだ——」

会社、というのは亜希子の夫、船山慎平が取締役社長をする日本橋の船山貿易興産である。戦前、慎平の父の代に設立された中堅の貿易商社であり、主にアメリカやヨーロッパに焼きものや洋食器を輸出して着実に業績をのばしてきた名門の個人商店であった。

そこに慎平が愛人を……?